

「芸術の森フラワーロードに 花を咲かせる会」

—— 札幌市南区 ——

代 表
大谷 洋子さん



市民からの手紙に励まされて

2000年（平成12年）10月に会を立ち上げ、毎年、国道453号の左右両歩道の花壇にきれいな花を咲かせている札幌市南区の「芸術の森フラワーロードに花を咲かせる会」。多くの人に感動をプレゼントしているボランティア活動が広く認められ、節目の10周年になる2010年に、第21回全国「みどりの愛護」功労者国土交通大臣表彰を受賞しました。これまでも北海道が主催する「北のまちづくり賞（花と緑部門）」で知事賞を受賞するなど、数々の賞を受賞していますが「今回の国土交通大臣表彰の授賞式には皇太子さまもご主席され、本当に名誉ある賞をいただいたんですね。とても感激しています」と、うれしそうに話す代表の大谷洋子さん。こうした大きな賞はもちろん、市民から手渡しされた自筆の手紙にも励まされると言います。大事にしているそのお手紙を見せていただくと、「芸術の森へ“花の道しるべ”」と題し、PMFも開催される、文化の香り高い芸術の森までの道が一時期味気ない無機質な空間だったことにはがっかりしたこと、それが大谷さんたちの活動により美しく蘇り、最初バスの中か

ら花壇を見た時は感嘆の声をあげたほどで、花が咲く様子を丁寧にカメラにおさめながら沿線を歩きながら至福の時間を過ごしたこと、そして大谷さんたちの活動にとっても感謝していることなどがつづられていました。この方のように手紙にしないまでも、芸術の森までの花咲く道を楽しまれ、「美しい道路づくりに汗を流してください、ありがとうございます」と、心の中でつぶやいている方が、きっと大勢いることでしょう。

高低差のあるオリジナルデザイン

芸術の森フラワーロードに花を咲かせる会は、無理することなく「自分たちの足もとは自分たちできれいに。できるときに、できることを」をコンセプトに、約170人の会員が、国道453号沿い直線2.82kmを、毎年約13,000株の花々で彩り鮮やかな風景を創り出し、清掃作業も行っています。ここは芸術の森への入り口だけではなく、小中学校生の通学路にもなっています。

1年間のスケジュールは、ゴールデンウィークが終わったぐらいから土おこしをして、6月に入ると花を植えるはじめ、その後、それぞれの担当花壇を決めてい



オリジナルデザインの組み合わせ「6・4・4」

るので草とりなども自主的に。10月には片付け、堆肥にし、来シーズンに向けてのデザイン会議を開始。また11月は納会を行い、互いの苦勞をねぎらいながら親睦を深め合います。北海道の夏は短く、春から秋まで駆け足で過ぎていきますが、花の咲いていない時期も会では、年3回発行の通信を作り、必ず手渡しするようにしています。そうすると高齢になった会員や元会員もおり、中には伴侶を先に亡くし一人暮らしという人も。手渡しは、実際にその人に会うことで、元気で過ごしているかどうか様子の確認もできます。また「大人の修学旅行のようです」と、貸し切りバスで、花のまちなどへ出かけて行くこともあります。

ところで会を継続させていくには、会員の負担を減らすことも大切なポイントになってきますが、その秘策として大谷さんたちは「6・4・4」のオリジナルデザインの組み合わせを実行しています。これまで、翌年に向けたデザイン会議でその年の花壇を検証し、限られた花苗でどんなデザインを採用することで、よりきれいに見せられるのかと話し合ってきました。経験から、ただやみくもに、あれも、これも植えればいいというわけではなく、虫がつきやすく弱い品種や花がらを常に摘まなければならない、良い状態を保つには人の手を必要とする過保護にしなければならない品種を見極められるようにもなりました。年を重ねるごとに改良され、労力をおさえて美しい花壇にするコツがしっかり掴んでいるようです。ひと口に10年といっても、毎年同じように花を植えてきたわけではなく、試行錯誤を繰り返しながら、あらゆる面で進歩してきました。

腰水づけで会員の負担軽減

大谷さんは「まず花選びは手間のかかる花をたくさんおかないで、それらのボリュームは少なめに。手のかからない花を多めにします。しかし、これだけを基準にして選んでも、なかなか見応えのある花壇はできず、ここで重要になってくるのが高低差です。やはりいくらきれいなお花でも、べたべたと平面的なデザインよりも、高低差のある植え方のほうが視覚的にもおもしろいと思うんです。風通りも良くなりますね」。

そこでたどり着いたのが、オリジナルデザイン「6・4・4」の組み合わせです。まずブルーサルビアを2列に6株植え、その隣にピンクのペチュニアを4株。またはペチュニアの代わりにインパチェンスでも良く、こまめな花がら摘みが必要なペチュニアのような



「腰水づけ」の様子と大谷代表

品種を4株入れたら、その隣にはほとんど秋口まで手のかからない白妙菊を4株。ブルーサルビアも最初の頃は手がかからず、夏を過ぎ穂がブルーの花をつけだしたら折ってあげる。そうするとまた横から花を出します。庭植えと街路花壇では条件が違い、ともすれば園芸家からすると密集のさせすぎと目に映るかもしれませんが、インパチェンスは乾燥に弱いのであえて密集させます。これもまた、これまでの失敗から得た独自の法則です。この「6・4・4」のデザインを採用することで作業も楽になりました。また、参考になる事例として「腰水づけ」は、はずせません。これは花を植える前に、花苗をポットのままブルーシートで作った四角いプールに入れ、主根にたっぷり水を吸わせます。ポットはカゴに入っている方が、作業は手早くできます。3～4時間をめどとし、水位は苗の半分の高さ以上。これで夏の間は、水やりの必要がありません。大谷さんは「オリジナルデザインと腰水づけを取り入れたことで、会員が頑張る必要もなくなりました。10年間の集大成です。花がしおれる前に人間がしおれてしまうようでは、活動を行う意味がありませんからね」と言います。

道内には、花が大好きで、自分たちの街を花できれいにしようと活動するボランティア団体がたくさんあります。しかし、活動が長くなれば会員の年齢が高くなり、負担を軽くする何か良い方法はないだろうかを探しているところもあるかもしれません。こうした大谷さんたちの実績に裏打ちされたアイデアは、同じ花の活動をする団体のヒントになりそうですので、ぜひ参考にしてみたいと思います。紙面を通じてのお知恵拝借で、その団体の活動にプラスの作用がもたらせれば、きっと大谷さんも喜んでくれるはずです。